

ラボの世界

THE WORLD OF LABO

地球の時間を 感じる旅へ

02 : 10代とともに・赤坂憲雄氏



夏の受入れ: 08



10 : 東京言語研究所



ラボ・インターン発表会: 10

今号の「10代とともに」では、東北学の研究者・赤坂憲雄先生にお話をうかがいました。

2011年、赤坂先生は東日本大震災直後の福島県南相馬市を訪れました。市は津波による甚大な被害を受け、一面泥に覆われた田んぼは「世界の終わり」を思わせたそうです。しかしそれから少し時間が経つと、そこには植物が芽を出し始めました。しかもそれは100年も前に絶滅したと考えられていた植物。人が開拓をすすめるなかで地中深く埋もれていた種子が水をかぶることで命をふき返したのです。

赤坂先生は「人間は自分が世界の主人公のような顔をしているけれど、そうじゃないのかもしれない」といいます。私たちもまた、異文化を体験するとき、「自分が考えていることだけが正しいわけではない」ことを学びます。地球に生きるすべての人が理解を深めあうために、ぜひその体験をたいせつにしてください。

◀ 平均樹齢500年を超える巨木からは「地球の時間」が感じられる(オレゴン国際キャンプで)

05 : 夏の訪問



10代と ともに

名もなき人の生き方から みえてくる東北が好きです

民俗学を研究する赤坂憲雄氏は、みずから東北に住み、各地の人の話を聞いて、いまだ見出されていない東北の姿を追求する〈東北学〉を生みだしました。インタビューでは研究者になった経緯や、震災後の東北や若者への思いなどをうかがいました。



Akasaka Norio
赤坂 憲雄

1953年、東京都生まれ。民俗学者。学習院大学教授。1978年、東京大学文学部卒業。1985年『異人論序説』（砂子屋書房）を出版し、作家デビュー。1992年、東北芸術工科大学助教授に就任。1999年、東北文化研究センター設立。同年、雑誌「東北学」を創刊。2007年『岡本太郎の見た日本』（岩波書店）でドゥマゴ文学賞受賞、2008年、同書で芸術選奨文部科学大臣賞（評論等部門）受賞。2011年、東日本大震災復興構想会議委員に就任。被災地を歩き、公演、シンポジウムなどを行なう。福島県立博物館館長、遠野文化研究センター所長も務める。著書多数。



『異人論序説』
（ちくま学芸文庫）



『東北学／忘れられた東北』
（講談社学術文庫）

—10代の頃は、どう過ごしていましたか？

「深い海の底から世の中を
ながめているような気分でした」

ぼくが10代だった1960年代後半から70年代にかけては、学生運動が盛んな政治の季節でした。学校が機能なくなり、通っていた高校も1年生の秋には1か月半ぐらい授業がまったくなくなりました。

その間、ぼくたちは毎日毎日議論して暮らしました。「高校生活って何なのだろう？」ということから始まって、いろいろな疑問や考えたことをぶつけあうような日々。やがてその状況は収束していくのですが、その最後が高校2年生のクリスマスの手前でした。

何人かのなかまたちと校長室を占拠して、ハンガーストライキのまねごとをしました。決して政治的な思想があったわけではなく、ただただ納得できない若者特有のいらだちをかかえて、のたうちまわっていたのだと思います。それで停学5日間の処分を受けて、2年生の3学期の期末テストをぜんぶ白紙で出しました。ぼくのなかまはその提出さえ拒んだので、除籍処分で高校を辞めさせられ、ぼくはひとり高校に残りました。

それがものすごく大きな体験になりました。ぼくは彼らが正しいとは思いませんでした。でも、自分が正しいとも思えないし、「なにが正しいんだかわからないよ！」という状況でした。

ぼくはそこから、まったくしゃべらない子どもになりました。それは20代の半ばくらいまで続きました。いまもすごくゆっくりしゃべるでしょう？ それは、自分のことばを聞いているからです。ぼくが教えている学生にもしゃべれない子がいますが、その気持ちがよくわかります。しゃべらないのは、だれかの話を聞いていて、一生懸命それについて考えているからです。そして、答えを返そうと思っているあいだに、場面は次に移っている。なんだか深い海の底で、ことばやほかの人たちがふわふわ海面に浮いているのを見あげているような感覚でした。自分のことばをみつけるのに十数年かかりました。

—研究者になった経緯を教えてください

「東北をフィールドに研究し、
父の人生をたどってみたいかった」

ほとんど人前でしゃべらなかった10代でしたが、本だけは1年間に何百冊も読んでいました。ジャンルは手当たり次第、どんな本でもです。また、読んだ本のとてもだいじだと感じたことをノートに書きうつすこともさんざんしていました。高校卒業後は小説家になりたいと思い、小さな学習塾を開いて近所の小学生に教えるかたわら、執筆活動に取りくんでいました。そして、32歳のときに『異人論序説』という本を出版し、デビューしました。〈異人〉とは、よその、変な人、訪れてくる人など、いろいろな意味があります。それが自分と重なりました。結局は自分のことを知りたかったんだと思います。その本が注目されて、原稿の依頼が来るようになりました。

執筆活動を通じて、ぼくは民俗学に関心をもつようになりました。きっかけは日本の民俗学をつくった柳田国男の本に出会ったことでした。民俗学は、古くから民間で伝承されてきた民俗資料をもとに日常生活文化の歴史をたどり、いまの生活文化と比較して新しい知見を得る学問です。柳田国男の本を読んでも考えることが多くなり、雑誌に柳田国男論も連載することになりました。その連載にあたり編集者から出された条件が、「旅をしてほしい」というもの。ぼくが引きこもりみたいなタイプで、本を読んで本を書いていたため、もっと生きている人たちのいる世間に出てみなさいと背中を押してくれたんだと思います。取材費がかかるのに、それをかけてでもぼくを世間に押しだしてくれたんだと、いまは感謝しています。そのおかげでぼくは日本中を旅するようになりました。北海道から沖縄まで、いろいろな人たちに会い、いろいろな話を聞き、次第に民俗学という世界に近づいていったのです。

そのような活動が評価されて38歳のときに「大学の先生にならないか」と声をかけてもらえました。就職したのは、当時、新しくできた



ばかりだった山形の東北芸術工科大学です。ここで東北をフィールドに研究したいと思いました。じつは、大学の話をいただいたときに、いちばん先に思ったのは父のことでした。父は福島県で炭焼きで生計をたてていた人でしたが、その人生をほとんど聞くことができなかったのです。それを遠くで確かめてみたいという思いがありました。

大学に就職してから20年間、とにかく東北中を走りまわりました。いろいろな村のおじいさん、おばあさん数百人に、どんなふうに生まれて、どんな子ども時代を過ごしてと、その人生について根掘り葉掘り聞いては書いていきました。父と同じ炭焼きしている人を訪ねて、仕事を体験させてもらったこともあります。「そうか、父はこんなことをしていたのか」と、父親の人生のむこう側にひろがっている世界に一つひとつたどり着くことができたのは、ものすごく幸せな体験でした。

—先生が感じる東北の魅力は？

「豊かに、したたかに、一生懸命、生きる人がいることです」

民俗学は、名もなき人たちの生き方から学ぶ学問です。ぼくはそこからみえてくる東北の姿が好きです。日本中を旅するようになったばかりのころ、山形の新庄というところの芸者さんを訪ねる機会がありました。そのとき彼女は74歳。じつはがんで、余命が数か月とお医者さんにいわれていたようです。でもそんなことをひとこともいわず、当時は若造だったよそ者のぼくにいろいろ話してくれました。彼女は12～13歳のときに、秋田県の西馬音内（にしもない）というところから新庄の花街にやってきました。でも彼女は「芸事をしたくてこの道を選んだ」といっていました。

話を聞いたあと、朝日新聞の支局長さんの粋な計らいで料亭を貸しきり、三味線などの芸を見せてもらいました。しかもその席料は彼女が払ってくれました。すばらしい宴席の最後に、ぼくは「こんど生まれてくるときは女性がいいですか、男性がいいですか？」と質問しました。すると「こんどは男がいい。男で

ないと入れない浄瑠璃の世界で、芸を磨いてみたい」といいました。とてもいい話を聞かせてもらったと思い、ぼくは彼女の話朝日新聞の記事に書きました。彼女は新聞の切り抜きを手に、自分が世話になった街中の人たちのところに「こんなふうに乗ったんだよ」と見せて歩いたと聞きました。そして「いまごろどうしているだろう」と、ふと思い起こしたころ、彼女は亡くなっていました。

なぜ彼女はあんなに喜んでくれたのか。たぶんなかを予感したんだと思います。もう自分の人生は数か月しかない。そこに突然のように若者たちが現れ、自分の人生を聞きたいという。だからきちんと語り残しておきたい。芸者だから売られた不幸な女なんだろうと、マイナスイメージばかり押しつけられてきたけれど、自分はそうじゃない。芸事が好きでこの世界に入った。誇りをもって生きてきたんだってことを語りたかったんだと思います。ただ、彼女が語ってもだれも信じてくれません。でもよそ者のぼくがそれを文章にして朝日新聞に載せれば意味が変わります。だから彼女は賭けのようにぼくを受け入れて、話を聞かせ、書かせてくれたのでしょう。そういう小さな人生からみえてくる東北がぼくは好きです。みんな一生懸命ひしひしと生きている。そういう人生を一つひとつ聞き書きしながら歩いていると、豊かさみたいなものだけでなく、したたかさも感じます。それがすごくいいなと思います。

—研究でたいせつにしていることは？

「自分の思いこみで、その人生を切り取らないことです」

なるべく先入観なしでその人とむかいあうため、事前にあれこれ調べないようにしていました。当然、聞いてわからないこともありますが、それは帰ってから徹底的に資料を集めて調べました。なぜそうしたかというと、おじいさん、おばあさんはいろいろ話してくれるけれど、こちらが聞かなければ出てこないこともたくさんあるからです。会話ってそうだよな？ ぼくもきみたちに質問されて、記憶を思い起こしたり、考えたりしてしゃべります。だから、幅

広く質問することがたいせつなのですが、先入観をもつと質問の幅が狭くなります。たとえば村の生業（なりわい）について、民俗学ではいちばん先に稲作について聞くというセオリーがありました。そうすると研究者はだれもかれもみんな稲作のことばかり聞いて、「おれは炭を焼いていた」「木こりをやっていた」という人の話は、〈その他の生業〉というくくりであまり重視しないケースが多かったのです。でも、そのおじいさんにとってはほとんど炭を焼いて暮らしていたのが現実です。聞き方の固まったルールがあると、その人生をルールに合わせて切り取ってしまう。ぼくはそれをどこかで違うんじゃないかと感じていました。

実際、山形県の庄内地方にある日本海の小さな漁村を訪ねたときもそう感じました。ぼくは明治が大正前期の絵ハガキに海女さんらしい女性が描かれているのを見つけました。それまでこの地域に海女さんがいることを聞いたことがなく、その漁村のおばあさんに絵ハガキを見せたんです。すると「ああ、おれもやってたよ。海女さんのリーダーだったんだよ、若い頃」とのこと。その村では、十数人の若い女性たちが、季節ごとに海女の仕事を務めていたそうです。そのおばあさんのところをいろいろな民俗学者が何度も訪ねていたのに、だれもその話を聞かなかったんですね。

ただ、最近は先人の紀行文を参考にするこもたいせつだと感じます。100年前の旅人が残したものを読みながらその土地を訪ねると、たいてい激変しています。でも、当時のお祭りの神楽がいまも伝承されているなど、変わらずに残っているものもあります。時間変化のなかで生じたズレ、落差、変貌などを追いかける旅も、とてもおもしろいと感じるようになりました。

—東北は大震災を受けました。どんなことを思いましたか？

「〈世界の終わり〉と思ったけれどそれは、人間のエゴかもしれせん」

福島県南相馬市20km圏内が警戒区域と

10代と ともに



「私たち人間は、世界の主人公のような顔をしています、そうじゃないのかもしれない」

して設定される前日に、そこで被災した文化財をレスキューできるか判断するため、ぼくと学芸員の合わせて3人が市内に入りました。

東京電力福島第一原子力発電所から20km圏内にある村上海岸付近まで行くと道沿いの家がぜんぶ被災し、ぼくら3人以外はだれもいません。周囲は泥の海が一面にひろがっていました。田んぼがぜんぶ泥に埋もれていたのです。

道が寸断され、これ以上は進めないというところで車を停めて外に出ました。夕暮れが迫っていました。聞こえるのは遠くから響く潮騒の音だけ。〈世界の終わり〉とはこういう風景なのだなあと呆然と立ちつくしました。

でも、その後、そこに絶滅危惧種といわれていたミズアオイが一斉に芽吹きました。その地域には、かつて潟や潟湖(せきこ)がたくさんありました。潟湖というのは遠浅の海から砂州で分離された湖、いわゆるラグーンのことです。その昔、ミズアオイは、沢の水がラグーンに入り、真水と海水がまじりあう汽水域というところに群落を成していました。ところが明治時代に人口がどんどん増え、潟は開拓されて田んぼになりミズアオイは姿を消していきます。それを人間たちは絶滅危惧種といっていたのです。

ところが田んぼが津波をかぶって泥の海になり、津波によって土が攪乱されたときに、眠っていた種子が表に出てきて温められ、芽吹いたのです。つまり人間の時間やものさしで絶滅危惧種といっているけれど、じつは、自然の側には自然の時間があって、こんなふうに絶滅したと思われる植物が眠っている可能性もあるんです。世界って人間が主人公

のような顔をしているけれども、そうじゃないのかもしれない。そんなことを考えました。

—10代の若者にメッセージを。

「**都会をめざすことが復興ではありません**」

東北は経済を発展させて豊かになればいいという成長戦略のイメージを捨てたほうがいいでしょう。大きな富を得る経済は、中央集権的なシステムです。利益を上げようとするほど工場は拡大し、維持するためには莫大な電力なども必要になります。でもそこには地場のものがひとつもありません。そして利益の大部分が中央に吸いあげられています。

それよりもその土地の人がそこで働き、互いに環境を守り、得た利益を分かちあう経済がこれからは必要なのではないかと考えます。たとえば福島県で豊かな自然を生かし、自然エネルギー発電の会社を起業した人がいます。原子力発電のような巨額の富は生みませんが、そこでは若い人たちが誇りをもって働き、シェアした利益で十分生計をたてています。

かつて東北は〈道の奥=みちのく〉と呼ばれ、中央集権の手が届かず「遅れている」と思われていました。でもぼくは研究を通じて東北の文化的な豊かさを知り、それを中央との比較で測るものではないと感じました。風土、歴史、文化をきちんと学んで、そのなかで動いていく新しい経済のシステムをつくることで、成熟した暮らしや風景が生まれると思います。

(文責 編集部)

【山ノ井陽子P】●数多くのことを学ぶことができた。話を聞いたことで視野がひろがった気がした(蓮沼洸太／中2) ●10代の頃の話のなかで、先生自身の脳内からその記憶が消されていた、という部分がいちばん頭に残っている(谷川俊介／中2) ●「ルールにのっとってルールに乗っても、同じことしかできない」というのが印象的だった。みんなと同じことをするのが得意でなかった自分に自信もてるようになった(伊勢陽奈子／高2)

【嘉藤朋子P】●「自分らしくいることで学べることもある」ことがわかった。福島の魅力を発見しもっと好きになりたい(嘉藤侑生／大3) ●赤坂先生は人との出会いをたいせつにされていて、そのご縁でいまの仕事をしているのがわかった。自然エネルギーについてもっと知りたい(嘉藤英里／高2) ●赤坂先生は発言することが苦手とおっしゃっていたが、私も苦手なので、先生のことを思いだしてがんばって発言していこうと思った(芦沢 優／高1)

【廣木あゆみP】●自分がもっている意見を友だちと共有したり、本気で議論しあうことはたいせつだし、積極的にしていこうと思った(廣木翔真／高2) ●印象に残っているのは「地元の人では気づけないおもしろさがある」ということば(岡西花菜／高2)

【遠藤裕子P】●「新しい経済や新しい生活を考えることで新しい東北ができる」。私たち10代の人間は「自分たちがなにをすべきか、なにができるのか」をいま一度考えるべきだと思った(渡邊穂奈美／高2)

【白岩綾子P】●「森は海の恋人」。このことばは今回のお話のなかでいちばん印象に残った(前田花音／中3)

【志賀美貴子P】●「人間の時間」「自然の時間」ということばが印象的だった。人間中心社会のなかで、乱れていた自然の時間は、自分たちの手で取りもどしていけるべきだと思った(中本怜恩／高2)

【井上嘉子P】●縄文時代の頃から「東北」は圧倒的豊かであったと知り驚いた。そして30～50年後を見据えて議論し行動することが必要だとわかった(上田愛莉／高2)

【佐藤暁子P】●「お年寄りの人生を聞かせてもらいに、なにも調べずに行く」というのが印象的(原田 遼／高3)

インタビューを 終えて

【参加パーティ】

山ノ井陽子P、遠藤裕子P、白岩綾子P、志賀美貴子P、嘉藤朋子P、廣木あゆみP、井上嘉子P、佐藤暁子P(福島県)



【取材日】2019年5月

2019 夏の訪問 国際交流

Photo速報!!

2019年夏、海外の家庭にひとりでホームステイするプログラム(4か国)と国際キャンププログラムに、720名が参加しました。ラボ国際交流は、10代の若者がおとなになる入口としての「ひとりだちへの旅」、そして「体験を通して学ぶ」「異文化を理解」をテーマにしています。夏の各プログラムのおよび写真を紹介します。

韓国

日程 ■ 7月20日～30日
訪問先 ■ ソウル, ほか
参加者 ■ 31名



韓国でも
ラボ
キャンプ



小学5年生から 参加できる国際交流

- 短期間のプログラム
- 韓国ラボの交流キャンプに参加
- 現地の家庭にホームステイ

ニュージーランド

日程 ■ 7月24日～8月16日
訪問先 ■ タウランガ, ダーガビル
参加者 ■ 53名



ホストファミリー
以外にも
たくさん
日本を紹介



中学生、高校生のための 短期留学プログラム

- ホームステイしながら現地の学校に通学
- ESL (英語特別クラス) を受講できる
- マオリ文化について学ぶチャンスがある
- 現地小学校を訪問し日本文化を紹介するプログラム "Japan Day" がある

オレゴン国際キャンプ

日程 ■ 7月21日～8月12日
訪問先 ■ オレゴン州, カリフォルニア州
参加者 ■ 19名



あいさつは
ハイファイブ!



大自然を体験できる プログラム

- カヌー, 化石採集, 動植物観察, テント生活, 洞くつ探検など, 多彩な野外活動プログラム
- 全米から参加する中高大生と交流できる
- OMSI (オレゴン科学産業博物館) の専門インストラクターが同行

2019 夏の訪問 国際交流

Photo速報!!

この夏、北米（アメリカとカナダ）でラボ国際交流参加者がホームステイしたのは北米全土の29州。砂漠地帯から永久凍土の近くまで、山林、野原、畑、海、川、湖、町中など、さまざまな景色のなかで、農家、会社経営者、教師、会社員など、さまざまな職業をもつ家庭にステイしました。アメリカ、カナダから届いたこの夏の写真を紹介します。



カナダ	北米	アメリカ
日程■7月21日～8月20日		日程■7月21日～8月23日
訪問先■カナダ4州		訪問先■アメリカ25州
参加者■59名		参加者■535名
※出発および帰国日は州により異なります。		

48年の歴史をもつ国際交流

- 中学1年生から参加できる
- 現地の家庭に1か月ホームステイして家族の一員に



Map 北米(カナダ、アメリカ)参加州





ホストと
いっしょに
乗馬体験！



Foods

北米の食事には、
驚きがいっぱい！



大きな
スーパーには
大きなものが
たくさん！



国際交流 2019 夏の受入れ

今夏の「青少年受入れプログラム」では、北米、韓国などから100名ほどの来日者が、ラボ会員家庭にホームステイをし、ホストファミリーのみなさんのおかげで、交流をぶじに終えることができました。来日者とのような日々を過ごしたのか、ラボ会員のレポートです。



人と人のきずなから 始める国際交流

星 寿美代(星 凜太郎・潤之介保護者／神奈川県・佐々木雅子P)
来日者：Natalie Young(15歳)／香港

わが家にやってきたNatalieは、はじめのスピーチから爆発的な明るさとユーモアと度胸のある15歳。open mindな彼女を目の前にして、待っているあいだの不安は一瞬にして吹き飛んだ。

日本が大好きな彼女はたくさんの日本文化を知っていて、とくにアニメについては日本人も知らないアニメを知っているほどだった。息子たちはそのアニメをNatalieから教えてもらい、後にNatalieとの思い出の歌となるアニメの主題歌を何度もいっしょにうたった。

香港出身で上海のインターナショナルスクールに通う彼女とは、英語で会話をした。毎日、夕方帰宅すると夕ごはんを作っている私の

向かいにはいつもNatalie。お互い年の離れた友だちができたような気分で、中国の話、家族の話、学校の話、ラボ日本語学校でできた友だちの話、将来の話など話題は尽きなかった。「いろいろな情報が行き交う世の中だけど、国同士はいろいろあっても、人と人はなかよくできたらいいね」。最後に語りあったそのことばを忘れない。



家族の一員だったNatalie。お別れするとき、みんなで泣きながらハグした



知らなかった韓国を 教えてくれたギュウォン

柳澤彩葉(小6／長野県・伊賀仁美P)
来日者：JO,GYUWON(12歳)／ソウル

私はK-POPなど韓国が好きなので、韓国の子の受入れを希望しました。そしてギュウォンが来ることが決まりました。受入れははじめてなので、ギュウォンに会うまでは心配なことがたくさんありました。とくになかよくなれるかがいちばん心配で、それから、どうやってことばが通じるのかが心配でした。でも心配より期待のほうが強かったで



パーティでもいっしょに手遊びを披露した。おそろいのカチューシャをしたギュウォン(左)と

す。もちろん早く会いたいし、どんな子かなあ〜とずっと思っていました。実際に会ってみると、ギュウォンはとても明るくて、おもしろくて、思いやりがあり、会ってすぐになかよくなりました。

楽しかったことは、ギュウォンに韓国の手遊び「ヨンシミ」を教えてもらい、ふたりでたくさんやったことです。私のパーティや、サマーキャンプでのロッジ、私の小学校などで、韓国の手遊びでたくさん交流しました。韓国の受入れを体験して、私の知らなかった韓国の文化や手遊びなど韓国のことをもっと知ることができました。また絶対ギュウォンに会います。



「自分から動く」自信を 与えてくれた国際交流

両坂 駿(中2／愛知県・両坂奈美P)
来日者：Josiah(15歳)／アメリカ・オレゴン州

ぼくはオレゴン州から来たJosiahの受入れをしました。年齢は15歳でぼくよりひとつ年上。性格は陽気で、対面式のときからSiahはたくさん話してくれました。ぼくはSiahが来る前に「去年のアラスカでのホームステイのときよりもたくさん英語で話す」という目標をたてていましたが、対面式で話しかけてくれたときは、目標を達成できそうだなと思いました。Siahとは学校に行ったり、いっしょに映画を見たり、山に登ったり、佐久島に行って楽しみました。別れの日が近づくとSiahは「オレゴンに戻りたくない」といだし、「2年後に戻ってくる」ともいいました。そのことばを聞いたとき、よいホームステイができたんだなあとうれしくなりました。

この国際交流を通して自分が成長したと感じることは、人にいわれてから動くのではなく、積極的に次にすることを考えて動けるようになったことです。これから国際交流に参加するラボっ子にも「自分ならできると自信をもって話してみるといい」と伝えたいです。



陽気なSiahとはどこへ行っても楽しかった



チャンスをつかんで得た 最高の体験と思い出

吉本詩宏(高1／東京都・岩坂えり子P)
来日者：Harrison-Verne Wepener(16歳)／アメリカ・ミズーリ州



ハリソンと毎日いっしょに行動することで、お互いが成長できた

今回のわが家の新しい家族はアメリカのミズーリ州から来日したハリソンでした。ハリソンはとても明るくとても篤実な人柄でした。

ハリソンとのいちばんの思い出は、ふたりだけで渋谷へ遊びにいったことです。スクランブル交差点を見て、センター街を散策し、ハリソンにとっては初であったプリクラも体験しました。日本を代表する街で遊ぶことで国境を超えた絆をうむことができたのではないかと思います。

もしいま受入れを検討している方がいるなら、迷わず申し込んでください。人と違う経験をするとは、自分にとって大きな強みとなります。面倒をみなければならぬと考えがちですが、それは違います。自立した留学生がやってきますし、なにより留学生と過ごす時間は千載一遇のチャンスです。ぜひめったに訪れないこのチャンスを生かしてください。一人ひとりにとって必ず最高の経験と思い出となることでしょう。

自分を信じることを 学んだ高校留学



古賀 野々華
(高3/福岡県・金森陽子P)
留学先/アメリカ・ワシントン州

第31期ラボ高校留学プログラムに昨夏から参加した古賀さん。学校や町のそこそこに見られる原爆雲のロゴマーク。被爆国から来た古賀さんが原爆について堂々と意見を述べる姿が取材され、6月13日、NHKテレビで放映されました。彼女に高校留学をふりかえってもらいます。

中2でのホームステイ

ラボ高校留学に行きたいと思ったきっかけは、中2で行った1か月ホームステイです。そのときは英語もほとんど話せませんでしたが、日本と異なる言語、食べ物、文化などが新鮮で、アメリカという国に魅了され高校生でアメリカに留学するのが目標になりました。

Be myself

留学の目標は“Be myself”でした。初対面の人に自分を表現するのが苦手だったのを変えたいと思いました。アメリカの子たちは自信をもっていてかっこよく、私もそうなりたいたいと思いつつも、実際には英語をつかって表現するのはむずかしく、どうしたら自分らしくいられるのか悩む時期もありました。

自信をもつこと

ある日学校のカウンセラーにどうしたら自分らしくふるまえるかと相談したところ、“American people love themselves, and they always think they are the best.”

I think you care about other people too much, which is good and that's your strength, but I would say you should be proud of yourself more and take care of yourself because you are so sweet and awesome.”といてくれました。

たしかにいままでは、まず他人の反応を気にして自分の意志をたいせつにできていなかったと思います。でもカウンセラーのひとことでふっきて、しぜんと自信をもち、知らない人にも自分らしくふるまえるようになりました。が、ある日、英語の授業でうまく読めず現地の子に馬鹿にされて落ちこんで泣いてしまいました。ですがホストマザーが、“Why are you crying, did you do anything wrong?”と聞いたので“I guess, No.”と答えると“Yup, that's not your fault. You don't need to care about them. These people are always jerks anyway.”と励ましてくれました。

間違いを気にせず一生懸命伝える

それからは発音も気にせず自分がいいたいことを伝えようとすることで話す回数も増え、英語力が伸び、友だちも増えました。私はこの留学で得た自信や英語力が、

学校の原爆雲のロゴに対しての意見を述べたあの動画につながったと思います。最初は生徒や地元の方がたの反響が恐かったですが、自分の意見を伝えたいという気持ちが大きかったですし、周りの人が応援してくれました。

自信とは自分を信じること

自信とは文字通り、自分を信じることだと思います。人の意見もだいじですが自分の人生なので自分の意思をたいせつに自分を信じてこれからの人生をきりひらき、いろいろなことに挑戦していきたいです。留学先で楽しいときも落ちこんだときも支えてくれたホストファミリー、友だちや先生がたと築いた関係が留学で得たいちばんの宝物です。



「I love U.S.A.」——出会った人たちにサインしてもらった国旗をもって、山のてっぺんあたりで、友だちのプロカメラマンに記念に撮ってもらった

Recollections in America



馬とバンブキンパッチで



クリスマスにホストファミリーと



学校最終日に友だちと



大好きなホストファミリーと、お別れの日に家の庭で

公開講座

6月29日
国語を学ぶ・国語を教える

講師：野矢茂樹（立正大学教授／哲学）



書籍『国語を学ぶ・国語を教える』（筑摩書房、2018）をもとにして開かれた今回の公開講座では、大学生、大学院生、教員、会社員などさまざまな背景をもつ方が参集した。

「国語」とひとことでいっても範囲が広い。文学などを扱う文化を扱うものと、生活・仕事に役立つ国語力がある。今回は生活・仕事に役立つ、論理的な国語力について取りあげた。

日常の会話や仕事において、日本人のコミュニケーションは「共感」をベースに成り立っていることが多い。たとえば、話し手が聞き手に話するとき、聞き手が途中で質問をたびたび挟むと、話し手が「せっかく気持ちよく話しているのに話の腰を折られた」と感じることもあるのがよい例。話し手は聞き手に「わかってもらおう」として話すというより、「聞いてもらいたい」と思っているためである。日本人のあいだでは話し手と聞き手が同じリズムにのることによって「共感」の場ができる。聞き手は相槌をうつ程度で十分であり、こ

のようなことが、日本人がだいにしてきたことである。

しかし、上記のような共感をベースとしたコミュニケーションではなく、話し手は「相手がわかるようにきち

んと説明する」、聞き手は「話がわからなければ尋ねる」、「それが違うと思えば反論する」といった、生活や仕事の場面でもつかえる論理的なコミュニケーションを、国語の授業の目標にすることが必要だと考える。

そのためにこの講義では、生活・仕事に役立つ論理的な国語力として重要な力を、①つなげる力②要約する力③質問する力④議論する力、とし、各内容について具体例を交えながら説明した。

最後に、国語教育に寄せる思いについて述べた。「現場の先生方は、子どもたちの指導、保護者対応、教員研修など、日々の仕事やそれにかかるさまざまな制約がある。けれども、自分が「国語教育」でなにをやりたいのか、理想を話しあってもいいのではないのか。そして、教員ではない方々には、いま国語がどうなっているのかを知ってもらいたい。国語教育はだいたいだと強く認識してもらいたい、と締めくくった。

（文責：編集部）



ラボ・インターン発表会

1年間、日本各地でラボ会員と交流してきたラボ・インターン3名。7月11日にラボ国際交流センターで行なわれた発表会では、自分の研究テーマを発表し、日本人もよく知らない日本の文化について教えてくれました。

[テーマ] 神道(しんとう)

● アダム・ライリー (アメリカ)

神道や神社は日本にしかありません。鳥居の由来は「天照大神が岩屋に隠れたとき、お出ましになるように、岩戸の前に木を立て鳥を止まらせて鳴かせた」とが始まりです。御朱印も多くの神社からもらい、お気に入りもたくさんあります。



[テーマ] 和紙

● ペサニー・フラネリー (アメリカ)

9歳のとき、ラボの国際交流の受入れで折り紙を教えてもらい、そのおもしろさにビックリしました。日本に来てから和紙について調べ始め、「こうぞ」の枝を切る→蒸す→皮をはがすところから、実際に紙をすき、乾かすところまで体験しました。



[テーマ] 日本のストーリーの仕立て方

● ケイトリン・クレンデニング (カナダ)

アメリカと日本では、物語の作り方に違いがあります。日本の映画『君の名は。』とアメリカの映画『きつと星のせいじゃない』ではストーリーの仕立て方に違いがあり、『君の名は。』からは、日本独自の「起承転結」の考え方が感じられます。



THIS YEAR'S INCOMING INTERNS

紹介します！ 北米 第33期ラボ・インターン



コルター・マイヤーズ Colter Myers

出身：アメリカ・オレゴン州
年齢：24歳
日本経験：なし
趣味：写真撮影、映画、音楽、合気道、読書、スキー
配属支部：神奈川
(10月から4か月間配属予定)



ティラー・リーツ Tyler Rietz

出身：アメリカ・ノースダコタ州
年齢：22歳
日本経験：2014年来日（ラボ日本語研修、北米ホームステイ交流）
趣味：スノーボード、映画鑑賞、絵を描く、読書（フィクション）
配属支部：九州
(10月から4か月間配属予定)



ローレン・ジョーンズ Lauren Jones

出身：アメリカ・バージニア州
年齢：22歳
日本経験：2015年来日（ラボ北米ホームステイ交流）
趣味：ダンス、絵を描く、料理、外国語、音楽、ファッション、ボードゲーム
配属支部：中国・四国
(10月から4か月間配属予定)



横井裕子
小学校教諭

多くの「扉」が自分を築く糧となる

「One closed door leads to another that is open. 一方の扉が閉まれば、もう一方の扉が開く」。これは私が大好きな『ドン・キホーテ』のセリフです。うまくいかないこと、つらいことがあったときにラボ・ライブラリーを聴くと、セリフや音楽の一つひとつが自分の背中を押してくれるような気がします。

そんな私の中学時代。ホームステイ先へのおみやげとして準備した素がたりは、チューターや親の多大なる協力のもとになんとかできるようになったものでした。自信のなさから勇気がでず、いざ素がたりを発表したのはステイ開始から2週間が過ぎ



素がたりをした誕生日会。14thとかかれた人形をもらった

た頃、8月に開かれた私の誕生日会でした。家族や近所の友だちが集まってくれた場で、感謝の気持ちを伝えたいな、と考えた、自分にできる最良の方法でした。彼らにとってはたどたどしい英語だったでしょうが、最後まで真剣に聞いてくれ、拍手をもらったことは、20年以上たつたいまでも忘れられません。地道ながんばりは人に届く、と体感した瞬間でした。

中学生で参加したラボ国際交流が、私の人生の「扉」の始まりでした。翌年にはホストフレンドを受け入れ、高校では2度のオーストラリアンユースの受入れ。大学では教授の紹介で国際調査チームにも参加。外国の高校を訪問し、教育調査を行ないました。社会に出てからは、食品メーカーの海外事業部に所属し、海外に販路をひろげたり、海外の情報を日本に伝えたりすることに尽力する毎日でした。

いまは公立小学校の教諭として働いています。来年度から小学校でも外国語活動として本格的に英語教育が始まるので、どん

なことを教えたらいいか、教師は研究・研修に明け暮れる日々です。私もそこでもがいているひとりですが、同時にワクワクもしています。教科書も、辞書も、発音も、作文も全部たいせつだけれど、英語が話せて楽しいと感じることは、最終的には「人」がつながることだから。目の前の子どもたちが、いつか海を越えて「人」とつながることを期待しながら指導にあたっています。

私の人生は、さまざまな「扉」が閉じ、そのたびに新しい「扉」が開いて現在にいたります。そこには多くの「人」が関わり、時には「物語」が自信を取りもどしてくれました。扉を開けるには力が必要です。その扉の形によって開け方も違います。その先になにがあるかわからないので勇気もいります。でもその経験の一つひとつが、未来の自分を築く糧となることを伝えたいな、と思います。みなさんの未来がすばらしいものになりますように。

よこい・ひろこ＝小学校勤務
(奈良県・坂本悦子P・OG)

information

※詳細は各ウェブサイト(下記URL)をご覧ください。

国際友好親善事業

ADDRESS www.labo-intexchange.or.jp/

■海外からの青少年受入れプログラム

- オーストラリア(6名)※予定
日程:12月中旬～2020年1月初旬
- 中国・上海(6名)※予定
日程:12月中旬～2020年1月初旬
- 第33期ラボ・インター北米(3名)
日程:8月末～2020年8月中旬
 - ・アメリカ・オレゴン州より1名
 - ・アメリカ・ノースダコタ州より1名
 - ・カナダ・バージニア州より1名

■交流団体との合同委員会

- 4-H Fall Coordinators' Conference
(4H交流担当者研修会議)
日程:10月9日⑩～11日⑤

■理事・評議員会

日時:11月22日⑤18:00～20:30

東京言語研究所

ADDRESS www.tokyo-gengo.gr.jp/

■理論言語学講座(後期)

理論言語学のひろい領域について、入門から上級まで講座を開講
開講:9月30日⑩～12月16日⑩

■2019埼玉県立総合教育センター 一般公開「集まれ! “センター探検隊”」

小学生年代を中心にした各種講座を開催。東京言語研究所は「ことばの不思議発見ツアー」と題して、ことばのふしぎやおもしろさが発見できる早口言葉やゲーム、クイズ、ワークショップなどを開催予定です
日程:10月19日④10:00～15:30(予定)
会場:埼玉県立総合教育センター

■公開講座

日程:2020年2月29日④
講師:南風原朝和(広尾学園中学・高等学校校長)

■集中講義

日程:9月14日④～15日⑩
講師:西山佑司(慶應義塾大学名誉教授)
日程:2020年3月28日④～29日⑩
講師:木村英樹(東京大学名誉教授)

ラボ日本語教育研修所

ADDRESS www.labo-nihongo.com/

■外国人のための日本語教育

日程:7月1日⑩～10月4日⑤

【7月27日～8月25日は夏休み】

10月15日④～12月19日④

受講者:ベトナム、韓国、中国、モンゴル、アゼルバイジャン、タジキスタン、ミャンマー、ロシア、シリアからの留学生

■日本語教師スキルアップ講座

「中上級レベルの教え方(理論と実践)」

日本語教師として活躍中の方を対象とした、実践重視の教え方講座

日程:10月18日⑤～12月6日⑤(予定)

※毎週金曜日(全8回)

■地域の多文化共生の推進

「日本語ボランティア入門講座」

地域で活躍する日本語ボランティアの養成講座をラボ日本語教育研修所が担当

日程:10月2日⑩～30日⑩

※毎週水曜日(全5回)

場所:かわぐち市民パートナーステーション(埼玉県川口市)(予定)

★最新の情報はFacebookをご覧ください

<http://www.facebook.com/LaboJapaneseLanguageInstitute>

2019 夏の訪問
国際交流

Photo速報!!

今夏も各地でホストファミリーと出会い、
心を通わせ、たいせつな思い出を
つくりました。

Amazing Days

